木曽川中流域 3 市（可児市，各務原市，犬山市） におけるオオキンケイギクの分布状況

藤原宣夫¹⁾

1) 岐阜県立国際園芸アカデミー fujiwara-nobuo@horticulture.ac.jp

摘要： 特定外来生物であるオオキンケイギクの駆除方策検討の基礎資料とするため、2006 年に岐阜県可児市、2007 年に同県各務原市、2008 年に愛知県犬山市で分布調査を行った。調査は、花期の 5 月～6 月に主要な道路の踏査により行い、生育位置、規模、生育地の土地利用を記録した。生育位置は、可児市 325、各務原 542、犬山市 417 が記録され、河川、道路等の大規模な生育地に加え、居住地全域に広がる状況が確認された。

キーワード： オオキンケイギク、特定外来生物、木曽川、可児市、各務原市、犬山市

1. はじめに

北アメリカ原産の外来植物であるオオキンケイギク (*Coreopsis lanceolata* L.) は、ワイルドフラワー緑化で多用されたこともあり、道路のり面や河川堤防に大きな分布をみることが多く、木曽川や天竜川で大規模な生育が確認されている^{3,4)}。

2006 年 2 月、環境省は急速にその分布を広げているとして、オオキンケイギクを外来生物法に基づく特定外来生物に指定した。これにより、その栽培、保管、運搬が禁止され、駆除についても努力が求められることとなった。

筆者は、駆除方策検討の基礎資料とするため、2006 年に岐阜県可児市、2007 年に同県各務原市で分布調査を行っており、その結果の一部については、すでに公表している^{1,2)}が、本稿では、さらに 2008 年に愛知県犬山市で行った調査結果を加え、3 市の比較を加味しオオキンケイギクの分布状況を報告する。

2. 調査地および方法

可児市、各務原市、犬山市の 3 市は、いずれも市界の一部を木曽川に接し、隣接する位置関係にある (図-1)。

調査は花期の 5 月～6 月に主要な道路の踏査により行い (踏査ルートは図-5～7 参照)、生育位置、その土地用途、ならびに群落規模を 4 段階 (1 m² 未満の単一株、1～10 m² の群落または複数株、10～100 m² の群落、100 m² 以上の群落) で記録した。また、特に大規模な生育地についてはその範囲を記録した。

3. 結果と考察

3.1 生育箇所数

生育地の確認数は、多い順に各務原市 542 地点、犬山市 417 地点、可児市 325 地点であり、単位面積あたりの地点数でも同様の順位となった。一方、単位人口あたりの地点数では犬山市、各務原市、可児市の順番となった (表-1)。

3.2 土地用途別生育箇所数

3 市の土地用途別生育箇所数を図-2～4 に示す。可児市では、道路および宅地での生育地点が他の用途に比較して多く、各務原市では農地が、犬山市では農地、宅地が多い。

今回の調査では、データの整理上いずれかの土地用途に分類したが、実際は、道路と宅地あるいは道路と農地の境界部に生育する例が多く観察され、草刈り等の管理分担が不明瞭なことがオオキンケイギクの生存に寄与していることが伺える (写真-1)。

管理の密度がオオキンケイギクの生育に関わる状況は他にも観察され、名古屋市のベッドタウンとして大規模住宅団地が多い可児市と犬山市では、住宅団地内の未建設区画が、オ

図-1 3 市と木曽川の位置関係

表-1 3 市の生育位置数の比較

	人口 (人) **	面積(km ²)	オオキンケイギク生育位置数		
			総数	1 km ² あたり	千人あたり
可児市	101,173	84.99	325	3.8	3.2
各務原市	150,024	87.77	542	6.2	3.6
犬山市	75,864	74.97	417	5.6	5.5

*旧兼山町を除く。

**2009年4月1日現在。

図-2 土地利用別成育箇所数（可児市 2006）

図-3 土地利用別成育箇所数（各務原市 2007）

図-4 土地利用別成育箇所数（犬山市 2008）

オオキンケイギクの安定的な生育地となっている（写真-2）。

農地の場合は、人為的に栽培されているものが多く、畑地では他の草花と一緒に育てられていることが多い。水田では生育はあまりみられず、畦の草刈りにより生育が防がれていると考えられるが、意図的に刈り残している状況が観察される（写真-3）。

100 m²以上の大規模な生育地に着目すると、可児市では道路に集中しており、道路の植樹帯やのり面に人為的に導入されたものである。各務原市では、河川に集中しており、木曽川の三派川から上流側の河川堤防が一大生育地となってい

写真-1 道路と宅地の境界部での生育

写真-2 住宅団地未建設地での生育

写真-3 意図的な刈り残し

る。犬山市では道路の他、その他に分類されたものが多く、具体的には、墓地、学校、レジャー施設、造成地のり面などとなっている。

3.3 生育分布

3市の生育地分布を図-5～7に示す。森林地域を除く、いわゆる居住地域には、3市ともに、おおむね全域に分布が広がっているといえる。

可児市の場合、特に大きな生育地は、市街地の広幅員道路の植樹帯と郊外の道路のり面にあり、住宅団地、河川沿いに中規模の生育地が分布し、市街地、農地に小規模な生育地が

図-5 生育地の分布（可児市 2006）

図-6 生育地の分布（各務原市 2007）

図-7 生育地の分布（犬山市 2008）

分布する傾向にある。犬山市も同様の傾向である。

各務原市の場合は、特に大きな生育地は市南部の木曽川三派川と、市北部の工業団地、住宅団地にあり、人為的導入が行われたものと類推される。それ以外の地域には、農地、宅地に小規模な生育地が散らばり、観賞用に栽培されているものと考えられる。

4. おわりに

今回の調査により、可児市、各務原市、犬山市の3市において、オオキンケイギクは居住地域のほぼ全域に分布することが確認された。特に大規模な生育地は、道路や河川、団地造成のり面にワイルドフラワー緑化により導入されたものと考えられ、管理者による駆除対策が望まれる。

一方、小規模な生育地の分布は観賞用に市民の手により広まったものと類推され、現在でも、法に違反するとの認識がなく、栽培が継続されている可能性が大きい。今後、外来生物法の主旨をいかに市民に理解してもらうかが、駆除対策上重要と考えられる。

オオキンケイギクのこのような分布の拡大は、旺盛な繁殖

力に加え、花の美しさによって生育が容認されてきたことが大きいと感じられる。ヒルザキツキミソウやユウゲンショウなど花の美しい外来種の逸出をよく見るようになってきているが、第2、第3のオオキンケイギクの誕生を防ぐために、花の美しい種の逸出が容認されることに注意が必要であろう。

引用文献

- 1) 藤原宣夫・大嶽和憲・安藤理恵（2006）特定外来生物オオキンケイギク *Coreopsis lanceolata* の可児市における分布特性，平成18年度日本造園学会中部支部大会研究発表要旨集：51.
- 2) 藤原宣夫（2008）オオキンケイギクの駆除による植生景観の回復に関する研究，第1回（財）公園緑地管理財団研究成果報告会資料：25-28.
- 3) 環境省外来生物法ホームページ（閲覧日 2009.5.25）
<http://www.env.go.jp/nature/intro/1outline/list/L-syo-01.html>
- 4) 国土技術政策総合研究所環境研究部緑化生態研究室・株式会社緑生研究所（2006）平成18年度オオキンケイギク分布調査業務報告書，63 pp.

（2009. 7. 15 受理）